

冊數	番號	部門
三	一四三	三

近江輿地志畧

四

日	寺	目
寺	日	目
日	寺	目
寺	日	目

58

近江書地志略卷之九

勝所 寒川辰清輯

志賀郡第四

一 吉備川 或曰吉善川又东川作或或者盤川也今人多俗
之字而以吉善之名不復用中流有深谷羊乃许源二つもつと
迫ねる所の近處も深くにはさむ川とちがひ多ゆる所より
まづ牛尾山の近傍あらう曲りて西行所の左側もまた
かくに流れ立所の下をくまなく曲りて至る所を
金鉢山と名づけたと傳ぐ者あり是れ山の西側の國
をくわゆる又古昔をば川をも呼すと云ふ事の國
としてやんまとされたりゆのじ方をも庭と號す

とて夏口手水の多大情代友東湯もく様と自らを
うそとしむれども、この事は、此の上り川一
半弓ほど下流に御川を古鳩川と云ひ古昔の主都より
車馬を引く所とあがの坂の名と號く御川の先をまことに移す
と申じて、左への道あるを古鳩川と曰ふ也。一車馬と
古鳩と申す事と思ひ、或ちの様形と善く似て起るもと
左記

そのまゝ印をとく、とまでもうはつま川はうそり
一歩登橋 中ち川の事までさういふが、さうした後で之を書く
格をこ終る事洋の文様と 部西 実に取扱

毛氏集

卷之三

神子外苑の木を多く伊豆の山より持てて來り

中をわざと見らるぬ中景とて大變好いと云ふ

蘇厚生之禱多此種矣予亦嘗取之中奇之云若人之

卷之三

一書も藏す。今の中川の後輩は、しかもお見えう
るに止む無き才の中心なる者也。心地云々を不思

一國寺
立わ泉町西毛山地をもと山に峰立ちて其處
心の事多きと云ひ其處を陟りて亦之爲人至辰年庚寅(

一雲寺
立印石一命宗西山也此處の事也

一清風寺
立傳川町西毛山也此處の事也

一西金寺
立印石一命宗御國も佛名寺也

一楊柳寺
立印石一命宗佛毛山也此處の事也

之三柿の事と云ひて

一山德寺
立了法寺一命宗毛山也此處の事也

一高麗寺
祀高麗也此處の事也

一福有社
立毛山也此處も又同姓也此處の始焉と云ひ中世公役

の所目守共役勤務者也此處寺也又に據止れ一年瓶役りつゝ
も主と少く事りれど、福有の姓とのゆゑといふ者あり。其の姓と
却角して毛山也此處の福有の姓より而と号す。其處店
と道く毛山の姓と毛事し。又云う(萬葉十二年)の物なり
ナムニヤ神社異するれ不效也あらば。

一福高寺
福有の事も一命宗毛山也此處の事也

一毛神寺
毛山也此處の事も一命宗毛山也此處の事也

一毛山也此處の事も一命宗毛山也此處の事也

一善正寺
立淮源寺一命宗毛山也此處の事也

一福圓寺
立毛山也此處の事も一命宗毛山也此處の事也

一花院寺
立毛山也此處の事も一命宗毛山也此處の事也

おまきのまちを備後三番のむ一こめ一毛山の邊社様
一毛山をアノとお傳承せりをゆゑて名を毛山而名鋪にゆる保わ西
念ちのれ、やうやくもやうへと名を換へはあまとまの剣と大槍和
太刀も生ええほれも種らのあらそもうも保けよ西を守る
あるの事もわざ

一秀郎用見る　吉田の差下の傍より四重石を毛郎の月見
石故に落石とくらを秀郎四毛の邊所のへまくらゆく
毎年四月祭を石とて供奉とする

一日え寺　立毛四吉所一室が佛光寺の毛院

一四吉大神社　大伴四吉所うちりの神也

本殿三重　中房家貴

右地主神
右璽主佛

神音寺と南社八日吉神殿也故四座近千堵地吹里譜云お傳北神
鎮座之日官幣使四位果也故號四位宮^ニ惟詭非也參神系
祉者欲冥祓永久移民安善也胡為上宗幣使之階仍為神明也
哉四神鎮座之胡有此^ニ祥^ニ享之貴不暇方牙^ニ進^ニ呼^ニ社^ニ傳
云延曆年中勅^ニ了^ニ其^ニ所^ニ先^ニ事^ニ旧都^ニ地^ニ里^ニ名^ニと^ニ津^ニ改
し^ニ則^ニ鎮護神を^ニふる今^ニの四吉^ニ碑^ニと^ニちにね^ニと^ニ
相^ニほの^ニも^ニ改^ニ古事記^ニア^ニと^ニと^ニ延^ニ萬^ニ下^ニ改^ニと^ニと^ニよ^ニ
思^ニくわの^ニと^ニ延^ニ萬^ニ下^ニ大^ニの^ニと^ニひく^ニ「四吉^ニ
モリクナ^ニハア^ニ破^ニを^ニ敷^ニ矣^ニ見^ニ尊^ニ地^ニ神^ニ四^ニの^ニ神^ニア^ニ
父^ニ中^ニせ^ニと^ニも^ニ少^ニ社^ニと^ニ少^ニの^ニも^ニ御^ニ川^ニの^ニも^ニ
怪^ニの^ニ也^ニ少^ニ迎^ニせ^ニ是^ニして今^ニミテ社^ニ御^ニ御^ニす^ニ月^ニ

早朝より博の庄へ取れぬもありそ、也あせに毫もまひひと、
日未の一の事より傍より至りて柳をほらと御すらくと柳
にほらをば流すととどくが清柳と云ふすものぞ柳をほら
日未の神歴と祀らるゝとてくが清柳と云ふすものぞ柳を
中古作の矩式流てより神と雲々の社すと、あまやうことと
はく、あはせに日未の神歴と云ふと毎年八月うち神事後九月
吉ふされ、なれば月内十四日と申してとゆ候うらどち神事と
らめくさんとまわのくもまく一ツの田黒侃侃部虚の歌生れを
擇へ人の參りにたりて太郎の町にあり、こもとの山洋主と
四宣うる神事と之ほの町をあらむを覺え候て御準備とく
包み神の木偶人をあくと申を致証すと申すと申て
事き御い前く振ふひをとし、御より仰へ御差をとむと
申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと
巨山鉢する程と申すと申すと申すと申すと申すと申すと
金洋御い御すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと
神鬼を申すが神鬼の爲め神事と申すと申すと申すと申すと
申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと
神事と申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと
申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと
神事と申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと
申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと
申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと

人は。興あくべのわと人らせんことをまきて社近より大災とま
やうとの多くとては事一而後平洋なるよひもひひくとあせ
をゆきよを宮社近のあそくもと人跡へもたれひくとあせ
ば神事ハ空言ヒ神官行まうもとまうりひだ黒と伊勢
名河と信攝山より御石姫姫の行母之れはしつさか
御神山の境内と信攝の山が名をア神と傳もとつ
今も言ふどもうけ、もとくしや

一夷社 印教の傍より社家湯ノ御の社とすもよ
山彦命の御の神多く夷と事代と云ひても神代乞事
代もむじ矣とゆる事と謂ひテモテクヤハシハツクヤ
予ヒ神祇迄ヒトウヒキササギ夷と申と云ふもく
元和の頃ヒヨウヒキササギ夷と申と云ふ也と云ふく
もスミヒ接駁の御ヒテキリテ御夷のものロ神ニトモ
モト事と云フ也ヒヨウヒキササギ夷根御荒神の
御事(御事御神御)ナカヒヒ御御御御御御御御御
一處申キ 丘に吉野キホヒ南面行徳ヒ南面の吉申と云
西あヒトは生ノ死ヒトニヒ傳テ、シヒ傳テのまうす
一芝名 深ノ土蔵室石の陰也ヒ
一寺も寺 石の御ヒモサヒモカ敷室の裏也ヒ
一寺も寺 石の御ヒモサヒモカ敷室の裏也ヒ

も寺大は寺のま一ノ寺ヒ伝天御御御御天御御御御
一達三

一大事寺

この御廟うしろ大字寺と申す。時士木をまわるの東流

孝子寺の三一にその寺を參てたる處とも云ふ。年一通

一九品寺

久留新田は西山停車所九番地の御寺の事。そのの

事も西山流川東山觀音の事。久留新田は年中後教比丘不退

事念佛の法場。トシヤモリノ尼に佛事は危の作。

一常徳寺

立り下り小林和氣の事。流なり

一圓音寺

五寺町流川ふる主山の事。四元坂大園

山門は山門松や木の津寺とよばれ。信郡守が成
員と天皇の入高寺を今もたゞ一寺とす。山門
の内を鳥居と呼ぶ。日僧少人寺とめにと況くち
仰高とぞぬくは元々からうすはてゆる年寺と松の
つやさにほれ文保で年ねく立む事のあらとぞ

一茶多寺

立石寺より一寺。西山寺を本流と仰ひとと見え

一長壽寺

以てとあり。今小西を名の事。

一西福寺

博多町大福山西福寺とどくに。序を本寺とす。

の事例。孝子寺の三一に云々。建奉令がある。承安甲子の年

建立。

一淨土寺

立石寺町一寺。本寺を本流とす。

一紅葉寺

萬葉町河内岸寺。本寺を本流。承安甲子の年

建立。

一弘昌寺

立石寺町の事。

一 唯泉寺 後至の町より一匁玉あら敷寺のま處

一 永心寺 お丸寺町一匁玉あら敷寺のま處

一 津寺 五福町の佛立寺のま處

一 ほし野毛 三河町と西多合國のすゝみの原の脚を井手成
一 玄海寺の北と長宿を傍く津のま處

とくとく

一大浦ち浦 もはよ橋全の西よりまの御室御殿又は御
一 菩提寺代元在れ寺也この寺は本庵に仰ぎてお長治御殿も是
寺代のまわり少すむえまことは太閤主吉松平の軍と云ふ事
一 五重塔を以れ作を是の後と西里までと云廢ればと
移り今金崎山と名あつるい車渡と移すの傳ひと云ふ
一 宝徳寺 五服町の一匁玉あら敷寺のま處

一 光德寺

五服町の一匁玉あら敷寺のま處

一 信光寺 三石門町同津山信光寺の津をま處
ある子孫のまくと延喜由室を恩徳や高め保と實中ノ年
建之う

一 銀光寺

小川町の津上高野性の沙室墨名之のま處

一 正見寺

吉川町一匁玉あら敷寺のま處

一 長壽寺

吉川町一匁玉あら敷寺のま處

一 お生与生社

ハト松の近處より土佐をさすすせんの社

いふ人玉形と名づけ信光寺をば禁母をさむ

一 湘龍寺

五丈浦山川町書留之原と高砂ある所も國道

拾遺の事例

一も妻寺　左の所は比年までも余の事例

一徒多寺　立少毛村一女三女を有す事例

一葉室町　大ほ盛り毛比寺を有す頃御所と頃母うさがふ

一達喜山國院　立少毛村一女三女を有す事例

達喜山國院の二女娘と立少毛村一女三女を有す事例
達喜山國院の二女娘と立少毛村一女三女を有す事例

不穎翁、立少毛村一女三女を有す事例

主町の領界河と主とは在る管轄北一揆の郊と郊一寺
御とお出で仰せ候事也號を地號と申すてちねの城
草河を北寄北流のまゝうりありて御城をもてて有
事ねひ、主と御河を御河とえ事御也御本城御城をも
あわせと馬橋河とえ事御也御本城御城をもてて
とあとの御軍河とえ事御也御本城御城をもてて
主の主は御邊河とえ事御也御本城御城をもてて
と支てて可と御河の主とえ事御也御本城御城を
わづと寄と主とえ事御也御本城御城をもてて
又を主と市を主とえ事御也御本城御城をもてて
事と主と市を主とえ事御也御本城御城をもてて
每節主と主とえ事御也御本城御城をもてて
心よりて被主と主とえ事御也御本城御城をもてて
今は御主と御領界と御主とえ事御也御本城御城を
し主とれとくとえ事御也御本城御城をもてて
と御主とえの御主とえ事御也御本城御城をもてて
移設御河と主と御河とえ事御也御本城御城をもてて
を御主とえの御主とえ事御也御本城御城をもてて
主と御主とえの御主とえ事御也御本城御城をもてて
主と御主とえの御主とえ事御也御本城御城をもてて

歌辞坂田東相の歌文人石屋元の楊柳と芝居より下り
原望と生と死とくふとくまきとくまきとくまきのゆく度
えのふきやの神を奉じてうらの上流へ女壁とすれえれのゆく度
ハ京と経る山内方をよせや幕りて津波は程どうぞ又
おほのをよそえれとくんそのれのゆく度をすくねて候る
よしとよすわへあはテ大波のゆく度を度とすへ牛と船
やうすうがれのゆく度とすへおもとすねへ

一泉福

船内町より一をよそむきの事廻り

一山氣子

ちよとゆき一をよそむきの事廻り

一山福寺

ちよとゆき一をよそむきの事廻り

一今樂寺

川下とよし津とよ京は北の主流とよひよ蓮社

一中保社

在今津中保町主神大師神或曰中保二十種神宿

一長島寺

江音寺町より一をよそむきの事廻り

一ね久和社

伊豆ノ門町より極太壁と表湯と水多と云ふの
ゆきとよそむきの事廻り

一六所社

伊豆ノ門町より極太壁と表湯と水多と云ふの

一ゆめの花玉とよそむきの事廻り

一尾花川 大津宿所の西極紀事よりの事也此川はおほ
山より出でて北流するが如く川より西を尾花川と
云はる今多くは小急洞或は投網等食事とお
て奉られ工價いゞ川と稱するより淺なり

一大津亭 左庵園所席間を三井亭頃と云ふと記す
而傍に二井の飯店舗、大通船とすと化へ而傍に之れ
泉涌の大津亭と云ひ文治元年移りの延喜大振形暨
有氏送雪と云ふと雪門より走車の事と泉涌の初之端即
之之事と傳せめんわくと大津亭と是に泉涌亭の事と云ふに
起るまゝ天皇御事ハと云ふ走車をとらうか直破せ
あゆみの門もと車渡とはまく
一津モ水 ちあはし泉之古若は水と乃く天守之主の内
多と傳せりがくと云ふと一日墨面者吉三が手に持つて
一縁けりと云ふと云ふ事ある。秀吉はもとより其を嘗て國政
を司り一萬余石と云ふ事あらずから思ふとゆきとゆきの間、
一堀川所鶴鹿村は年の大津津亭をとてとて
玉名屋町不遠寺の地とちる一室、其處より死んでえど
る而御子を事と仰ぐり 院主源氏成御子と云ふと云ひ正
月十日山門の三毛無事と降起てく防東をさういれちと云ひ
を射ちたるよりて恐るて莫干里年十九歳アリ西承文治元年二
月十六日蓬かよニ三井ちりふをとれじとせうのを花を以て入ま

一庵花川

大清宮所の西延親王御の御内閣はお延

山を出でて北を西に西を尾花川に
之を傍ら多々の小急網或は投網にて金魚を以て其と大
きな工合いが月と年とよの運び

一大律序

大練音 左座圓町席圓三升茶取と人清少納言
重筋ハ三升の从車位、大清船とすと花の重筋りねじ山に就
象浦の大練音とを以て文治元年松ノ木の延喜大抵御壁
村氏送雪と云ふと雪浦と大走の事と、雪浦の初之見御
之と事と能ものあわるく人情もと是れ象浦まの事と、古
越もまた天皇御車がとくとく御車をとくとくかへ古歌也と
あゆの門ちと車河もはまく

一
律
水

一株せ水 ちをほひかね古若り水を汲く玉智天皇の所
をと佐川ひくとんとくへ一日豊臣秀吉が御子、年少の
信ひとてくとく其事へまつ秀吉もすまと嘗て嘗て御者
をもりあまとくをかかうじり思へやうとゆく事の間、
亮の所謂直利は身の大厚徳をいたそなり
一西を軒を浮き也然立たぬあらゆる事福をうり向て
玉多喜寺不遠きのやどちも一室、致仕ちよ死もくえ院
の少翁寺をまたひかり。隆慶四年正
月十日山門のふれ悪く障起く御事大名の御者と御者と
ちがひたるもあらず。弘治五年正月十四日承天元年二
月十五日蓮かとく三井ちりる花とれしニ开きの御花を仰入まく

墨田区金の近松寺前を過ぐ蓮山、山房山に達する所まことに
刻一歌事入るち身の氣体と爲す。文治十三年十一月
中旬山傳主の神堂を新て就き、新堂と達成し、松葉を立木す
輕き火入を拂ひ、本堂と同様に三間の本堂とし、之を達
め、牛像と廢して色像を笠に是と並ね、其の傍とて、
今之行の墨面をうちて、向う左側の御堂と山根山とを遷
一上人月見山、御堂の傍へ引り、之を存達め。人代
ノ月見山と號して云々、後文の年中の事也。
一在長寺、立石は日本より京を聞きる事無く、やがて
と焉て永禄五年正月、日壯上人達主や、也は古山寺
也あくまう未寄

一昌門跡、元沙野町と云、或に神子町ともいひて、昌門跡
ともいふ。門は之れに據て、而して、門は危険と清く、
全被とすや、と云う。一間の廊を、竟印傳主に送れる
頃文、之を昌門の跡、小拂至る、拂平と云、人拂り、全拂と
全く思ふが、あるのを拂うる、拂うる、拂うる、拂うる、
拂うる、拂うる、拂うる、拂うる、拂うる、拂うる、拂うる、
拂うる、拂うる、拂うる、拂うる、拂うる、拂うる、拂うる、
一大津浦、そのものは度をもつて、多大の迫ねをして、萬
劫を以て、セ浦と名へセ浦と云ふ七浦の事なり。

名前もあつてゆきと古跡もありれども古事記の事は
抱き合ひてゐるひとと並んで久くはぬは九年の浦川をへる
八月廿日より三月廿日半價ともえり、八十便を万葉よりゆかり
れをうやのねも居てしに竟活え大書の門

巨房

えくい丈はの宿のさかとわざとまつて下りまよ
一原山油 大津油のとまと一筋四石山をくわへ原ゆす
すらやくわづかみや

万葉集

なづる原ゆすの春あせはははとわづか

近江輿志畧卷之十

志賀郡守立

一長等山 俗に三井寺と云ふのそく又はのやうに比叡山の
少傍山のちく等一き三井寺と云ふやも等と號すと少傍山
少傍の山と云ふ事と云ふ少傍山の山と號すと、蓋て少傍
山と呼ぶには山界と極はゆきとを言ひて、本を不等と定
の六年丁卯年春二月吉日と國、王室山也と比等フの後
はの塞ニ生ケ、傳はひて書曰けむ古松杜雲山等の御名
地名シ之宣最等と云ふ事と有つて元神孫也と号ひ、今仙正

諸山もも等も等も別もあらわひのまへ橋江改言伝と云
山南いも頬形拘守改言長等も玄丈長等も近川嶺山東抱
長江西岸山川北列嶽岳南倚大路嶽遠谷遂云

新古今 大徳正元

んせんせんやあまはまく幕も等すび代ものまをと

續古今集

高麗方資実

左比根のそよまひのまにねり事わふ代のま

千載集

高麗方肥得

こほやもまのまくはまくとくとくもの堅を

後金朝元序製

引きくらむとやまとひりと等まく等のまく

支本集

三経

四のまく金をとれむの隠などくほのまくとく

一園城寺

長等も山と等にせく、一せうとまをくはの西極即ち

大津のそつて二升を比入門を天皇天皇元年丁卯春二月帝

又和毛鳥あらう御もと殿大ほのあくゆきい一の総代もと
精舎を廻人車と致し、不善くへくへく令人門を奏しと云

西のまく、空函りと天皇おまかえり起と西のまくとく

火之細、土木四十丈計明延四年正月一日開敷地と見え

等もくもくと草へしの事ニ當るべくと云

は何の事かと云ひ候はる事を御内命傳と云う事同て白

永已占勝地降聞宦建復主其書既而珍其新羅山王二神及二比
立到寺向僧始寺僧以允比立來曰我名教待年一百六十二傳聞寺
歲以來遇我壽名始二十歲現今有於家孫乞問被待即呼人來
大友氏吳說主事又曰侍公曰名說歸之誕首延享寧和言當春
教事諱名久矣便以音之四至繫善者保授正寺云大友家祀曰南寺
久天武十五年歲次丙戌大友興多磨為交大相國所建遂揚也
昂金言美壽天武天皇仰御飯事重佛餉燈油料田之金堂
供奉記曰高寺故大友興多磨建立之地天武之地天武也而重之
佛殿也云寺德集寺曰高寺也二代御飯故加持統天皇俗丹之
緣三代之傳也云土門付紀補序曰固御寺傳軋造主寺之事
卷文所記莫越不一准也今持統天皇天皇八年己巳創寺十年
辛未天皇崩年壬申高寺大友薨於是造寺四年而止正寺此年
天武天皇崩明四年壬申高寺大友薨此年天武天皇及元白鳳明年
癸酉天武昂住役至白鳳八年癸酉過七年壬辰三知些多奉勅
復始奉至朱鳥元年造寺成切八年自始至此年數都計十八
年而成云亦三井寺と云者是寺之名水井开
水為佳也不冽不銑耳而且清妙異八德冬夏無端咸美是無双
之水也貞觀己卯年黑祖大師始至高山西遭大友都塔年唐
大師問之曰南寺額曰國寺更名佛井者何也大友應曰伽藍西砌
有井天智天武持統三白圭降誕之時掘此井以祝玉質皆因而
是名佛井暨以此地立伽藍俗復以水名寺呼曰佛井寺矣大師
聞之深以國心乃復改而為三而言之昂東三白圭倍井之義亦是取

用井丹水為三部灌頂之闌伽遠至慈尊三舍之斯之由乎耳
并以三井為寺号也。元亨稱書曰珍同大友氏曰此寺曰三
井何善曰寺之西岩有泉升天晉天武特統三皇降誕以汲
此井水為浴湯俗因而号歸井寺珍向北事見地勢究似唐書說
寺又思新羅明神言為寺名乃改歸井為三井曰五三皇浴井之
事又曰斜井丹水為三部灌頂之闌伽至慈氏三舍之期故斯二字
耳。白圭年代私記曰貞觀八年六月九日崩於一條院中敏年三
十二七月八日葬石塔暫安。九日奉輾拂骨於圓博寺百練抄曰
壽葬小長坂諱安。通佛骨於三城寺。同書曰珍傳曰貞觀十
六年尚書劉以近州三井園城寺為傳法灌頂道場。錫珍音通
唐地傳來佛像經籍四至山跡禁俗輩侵掠云。大友主寺劉
四至奏狀曰東限海掉立南限南下路金塲南邊下始以限新
羅現在谷山越過並下隨之。園城寺署記龍泉院創牛曰大凡
三井寺堂十九社十七塔一基鐘樓堂二宇二王門一宇舞臺一
宇寺中境內東西各町余南北六町半寺領四十六百九石九斗半
寺門後北補源曰後鳥羽院元和元年冬右大河源丸翁教傳以近
江國松山庄名被玉置庄永哥固伽寺民勤歸奉憲建立常喜
院割額近江國佐田庄大和國喜殿庄而外附當院承元二年一品
親王生子建三美相給割額領近江國木本寺寄内焉佐破院建
承元年九月吉日近江國和近庄寄内園寺也。承元年九月
歌村造八所大寺名門缺柱上工材とらケナ乃山打新刷

許持色七町セれ立間割別モドリ神山持三町神山持石尾
村追大町七丈一里保ヒテ程本少ト上の移ト大町アシム間小高
の内神山灰南土石移ヒテ石尾松谷と十二町若尾村神山村繁
トリ四百畝ト十二町半十四町四百畝松谷尾八十疊石移ヒテ九町二弓
主例追模外四百畝ナリ亨ニ千七十九也。是ハ元祐十三辰ノ年八月
主之主ノ年トイ改ム所ニ序朱トテナム也。

長年も國城寺領近江守後郡丑羽所持七石九十五石二町
小上村九百五十一石三引全御歐村平二千九百石中南御篠村
九百九十九石合四千六百十九石車往寛文五年七月一日
先判之旨壽附之訖如右東可配高義教生禁斷守護使
不入櫻内山林并奉酒役等先降承而可有相送者可抽固為安奉之
惣祈之狀如件

貞享三年六月十一日

序朱印

當寺三院と號モトハ中院南便也度也老吏の定と爲ヒテナム
三門主モト所謂実相院宮靈護院宮圓滿院宮セ切数八百半十九
也。此れも久終ヒテ七十坊を數ム。事記ス凡頃ナリ。之ヒテ也
社モトヨハ橘花ヒテリ。ソトヨハ以廟山の名ナリ。トヨヒテ
之井ちく限キテ賞物即レ付。

台山歴罷宿湖信曉起往行到上方山色秀鐘王者氣
林泉清汎角泉香寺禪俱是新傳戒觸目並非右追拂
晴既寂然同我國不知身已在何方

石川文山詩

智證寺高年園大乘瑜伽文山頤熟傳燈難外池青龍寺
多日之西川若瑟真僧。元和ノ詩を書きの詩と

玉裁集園即ちの代より久りやかゆく墨長
いみて草むらり山林などふといふとす。

此後失れたりもそととなんち夏のつるを雪化すもひりよ風を
喜む極れを絶せむにぞ、尼モ一山女人を甚めんと
七月十五日より申刻もとまわらのゆへとせまのあと夏
夜も秋山夕露あり母とひくつてすまのあたりくればのゆ
おととてすく仰みと見てすまのあたりくればのゆ
おののひくつらをひとときらと葉りれど七月十五日と一日冬の霜
とすくゆくは辰朝くと

一二三門 たかと窓延全別とあまん俗と二本とのよを長ハ
天まで運度の心と往來の門廢止の後度も年。書堂
の常主はあさの甲斐郡西ちあはれの門を改め移此今の
門をす

一瀧頭臺 五門外をあとと今へり
一慶院 桂門も全くもろひのさくらぬの信よりあ
今とほや天皇の貞觀元年正月十九日唐教傳東の
金胎南教曼荼羅の像並頭蓋二三の信書一千余軸を詔上れ
和く南支那とまづ國傳も切め。和く移仁勇般若
と度く刈る言有うけの度ぬるまのを放とくはゆく事

ノトシと白度身像及度化大師及送陽塵の青龍寺奉事

將軍の法器と奉く物と是をねめた

大日院王室冠 一頂 紋体如意迦葉 一條

阿難子者革鞋

行乞者名セ取
の明の童鞋

淮須法器

一具

首星王菩薩像 一軀

右立事と青龍寺傳法阿闍梨は金剛具大師

薩彌三摩那立鉢

土鉢金割鈴 各一口

右二事大師薩彌之後金剛閣梨校以為傳法之信白色佛舍利

粒、大
如大指 一盒相

右大師夢中之金割大師より傳り納く

中天竺大師蘭陀寺麥素達坦羅梵文 一帖

和義大師蘭陀寺佛殿前昊多羅樹皮梵夾 一帖

熱銅土鉢小金割鉢

一口

右三件ハ大師蘭陀寺の三藏般怛羅從西天竺將來ノテ福列刀
用元寺ヨリニ沙汰授供モム

鹿尾 一柄

南海枕拂木柱丈

一枚

右兩事を福州因え手の傍存、或和尚所學入

天皇具多羅樹柱丈 一枚

琉璃瓶子 一口

大唐唐州班藤柱丈 一枚

一副

右三事を大唐留子本國の傍因又度州又得之附共也

鐵篋寺山淨土

長丈六尺
度丈六寸

一鋪

鐵篋寺山淨土

長丈六尺
度丈六寸

一副

佛舍利

鉢琉璃臺

一壺

右三事之貞觀九年

大唐國内送佛舍利塔德因座主送來有法藏所

國像

上自欽迦葉下至
唐畫能像各五枚

右一件ハ貞觀九年唐務州人詹景全送來

大藏圖本

三百四十條卷

右一件ミ元慶六年大師差ガ師三慧入唐重令披寫ミ以上の外
佛像國像梵像比室器二宗の秘籍及大師在唐巡礼記ニ卷入
唐宋法目錄一卷唐國師互唱酬の詩集十二冊等將來比室物不可
收奉也予に而シテ或キ大師を志ム寛平五年の事モ大師座像
長聖人守秋の寺辨り送る所や像ハ中、大師の坐背とねし大
師名ハ圓珍字ハ遠慶小名ハ慶唯性を和氣氏護州那珂郡代人
又ハ毛威景行天皇十六代九孫也ト伍伯氏船傍ニ空海阿闍梨の
姫く媛御天白玉弘仁七年甲午初伍伯氏夢テ、朝暉也ト中、
入リトモモト得として延正時、春三月二十日也寛平三年十月
十九日辛未造體と唐僧も御も延長七年十一月廿日也寛化大師也
御少子の仰妻ハ三喜情行、美嚴席圓の慧解は三升の
き通、大師年譜ナム勒ヘ今不契々く毎年十月十九日也寛
化大師也又未だか以新堂トハムモ一日一夜健常もく法
義を修メルシテ大師傳と云、東經曰建條二年甲戌十一月七日未
晴も因成寺御深之同、下仙道原也奉之吉傳房之由有より
次第は前田惟家妙高堂も守高友多為相牽引宇勢入た達生
山王社

己下の多々十八羅漢也。常守者源宗ね代宗ふ室に所謂領内刺吏碑
宣教長は快季の周梨如意達大り之後以ニ男利即並義光為新羅
明神氏人以降任守府將軍兼殊離寺之丹祈而最愛の昂女首
濟ふと常識修正行親奉加持之忽以革復將軍感慨之辭詳信
吉子孫永可席和尚之門徒云々

一竟不動像長丈人如是達大師の作也嘗因珍い唐の日船裏風と達
甚是舟ノ船中の衣服を因珍と申し合掌とく不動もと念んばり
金色の人船尾立てて見之頸項と風上は静心聖日稱り
焉一因珍折り橋と以て船本現れの金色の人と別むなり其を
貢不動と云々

一山王棲現社 唐化禪の湯ノ御ノ御ノ御補滿曰貞觀二年庚辰

大師清山王ら聖千度坊は神名乎天台擁護神持厚大師嘉祥
年中神告大師勸入唐東法約其冥助或臨巖峯山王度受
菩薩大戒以結師資契勸請因在元始大師所在之所神半影
嚮山王院捷悅之神事降附故有神座因名山王院が在三井
唐坊是大師生院不可無神座仍今設座清神又立三井院曰
山王院未由是在之而已云々貞觀二年の勸請古今の社及み數
えて承二年至護院道祐王の再興と詔へやう新山王院也
云々

一尊星王堂跡 堂を唐化の元令主の後後ちぬの西修平等
院の廊内よりともかく福深とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
而れすとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

今も亦

一夢叟堂跡　夜虎の西上山あらゆるまつ橋場とぞも

トキナシ

一也大堂跡　玉の虎の西夢金虎の内へそと傳てまづ神様と號す
今も亦

一大講堂　南向五重六日高に称かのこち

一也屋塔等　河を傍く講寺とも對に

一護法王神社

少傳から社を南向とす神之像も四入八寸
多傳よりの心え又庄條一人三寸七分佛土仰込作之矣大ニ子の長
七寸七分半傳大師の仰貞觀元年大師建立貞和二年將軍
源平氏公再興アキ、護法王神を即訶梨希母神也本ト西天

の大夜叉名付く歎哉とよ容額彌塞也大威力りつゝ也十の
眷属とねんモ中下摩摩提國の婆タ大夜叉將の女とやナ
交健陀羅國の半丈迦大夜叉將と通称一三十比子と生じ廿百の
子と天上より立るの子をせうりテ千子皆鬼中の手と乍りて各
多くれ眷属と後より喜少するよりとるをと見とふ梵文を
畢哩孕迦とソ母神性特ヨ暮ニテノ國物と往來し他人の男
女と佈ふと殺取フリヒテ而あめセムと云ひて佛地走行とよしより
即一汗と云ふと妻児と露下衣と云ふと云ひて母神子児と
夫の顛れ降東と云ふ内か尋ねれどわりと云ひ西神牛と告ぐ佛の曰
汝干子の中一つと多ひてアリの云者殊と況他の一子なりと云
いのはす他人の妻也と云うるを要りとなほ母神の向の名も

佛の教説を従ひたるを佛と名見し。し等よみの三佛共成と接
く母神の云をもう悟る佛の私告ありやより佛はと後わざと
又汝等の一ゆゑく我下はの事すれ馬く擁護せんと後は母神
と稱れてもまく天皇宸見比清空御藍の中多く母神の廟と
建く。仏神の法護とんせり。所謂鬼子母神とてもすらふある
の爲申と大作土藏のほ一の天女降臨。告仰てまく見えまく
三光の中明星天子の精童虛空藏菩薩の化現。日也。ナ佛
法と興起せん。吾の取引く情く衛護とくと仰歸納の後奉
詔。南斗と興慶。一頭悉ニ赤を圍揚れ。以母神シトに奉現。ト
仰まくと前契と不違。復半より初半内くちく降は放諸と
遣移と。一ト仰應。三曰神のまよ事焉と。是モ多き。さり
從もひ。ひと。後裏の也。善神。うと。ひともを女神。と。シト。
然と吉山と擁護せよ。ひと。神まく云。あ。女男たれとも
已。佛西。かく。而戒。と。文ね。佛の德許。と。引。と。法。と。生
れ。而。し。伎。伽。藍。の。傍。と。と。佛。法。と。衛。護。と。次。ば。か。と。之。す。も。興
津利二宗法傳の。意。仰。か。と。佛。法。と。衛。護。と。次。ば。か。と。之。す。も。興
仰。か。と。と。象。參。戒。と。清。津。の。女。寶。と。わ。と。修。へ。や。唯。れ。く。
か。と。と。御。經。を。放。と。坦。昂。め。と。度。と。高。形。經。と。八。百。戒。と
か。と。と。御。經。を。放。と。坦。昂。め。と。度。と。高。形。經。と。八。百。戒。と
え。父。の。神。像。と。摸。利。と。と。と。御。藍。の。津。と。東。と。尼。戒。と
天。女。の。像。と。室。守。と。と。御。波。金。金。寺。と。互。五。歲。と。見。の
と。と。御。波。金。寺。と。互。五。歲。と。見。

傷全嘔吐と由くやれり或ひ散らす由てゆるより皆死胎
義と腹痛ともせしむる是が前と云れと背と貼て瘧疾燒へま
仰坐ねどものりを夜更と覺えず車のよとよとあつて成向
はされど背と腰と頭と足と脚と腰と腰と腰と腰の氣熱
汗出と腹痛を起すとてハ甚仰ひ又傍の人云ふ車と云ふ
吾門を施あとの事を以てとの事と云て此や一年余にはされ
ばけりやう主役ハ元と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云
田子記云々には高岡と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云
行一意象武多磨名天守危篤めく薨せられ一車日御紀
入そち上古ノシテ中世ノシテ之病はアモ赤海以セシミ

一尾池 舊法社の傍より生じて、水を引く事無く神之御在所
利弊して、尼寺よりまほ吸ねの池とす。此是記曰池水也。後也

一教待和尚廟　やまと祖堂下ノ護法社のゆり後、ちり教待和尚の石像もまぐすを券を定めんの仙と教待と神通延寿の仙僧也あく姓氏と詳くやれニ井ノ捷峰トシテモアリ侍奉一而全年清和天皇貞觀元年春大師新羅山王の二神と傳法の跡也とあり。以故より守りて時と年代と並びて至る時一充傍也其と歎仰也。俗一尊師と云々と舊聞のふと一先き御事より往來と空

充曾養て曰承之ハ教待年三十有五年を既、百六十二寺の歴も

事和寺と云ふ事治二十歳ニ又檀家の大友郡堵年磨末ノ真
寺の事と云く且待嘗富士師の誕育及廻事と號く有
時日寺主未至事何モ晚紀今す勅示曰寺主當至某トヨ真言
如一遂に待とたゞ寺院及四至と云々師と候セ授布か侍法
弘教の所と云フ侍伽藍の東北石窟の年々入る後不見
後、仰建一亭于窟上昂モ、廟と新羅の神、圓教待
今侍と号す、行者や神事く待と是、所勸菩薩の應化より
久々始て在弘教の師と求ム既に師と得たり故、晚
のミとのり、匡衡の本朝神仙傳曰三井教待近江滋賀郡の
仙人也、雖數百年容顏如生、常食蜜餞具骨忽化青白二
色の蓮花毫空則生滅而揚声高鳴仍此所云鳴橋大师
年譜曰世傳教待與清水行駁居遊幣之往來足着木履
其音如唱考集減道者寺門傳紀補錄曰大师建教待廟堂已
亦手刻真像安於其中真像中亡季祭祀毎年十一月十一日也或說曰
此和尚の入窟も春時也何を冬の事と云フ極もく是遷座
供養の時日と取るといふひく故窟内ニ處窟里ニ即和尚方邊
乞訴の穴窟と云ふ

一金堂 是天智天皇^武持統三代聖主の御氣内陣坐を常恒
不斬の三燈と云く、尊弘勤長三丈二寸、高坐大師之本室碑
の釋迦大師禪室の御事と南坐ノ席入寂の後此を付へて
百揆もむかひ我朝帝始くも以西海よりひく尊重甚欽歎歟
後傳、相承と天智皇帝も天武帝もとぞもとぞ取る九軒

と歴すらり來鳥元年より、件の正客として御す。移りてやし
てわざとくに或記曰大友興多丈六祐勸の像を送至し彼全の
小像は人像の中に、沙もとく、右半身の外累世代君臣奉納の
祐勸佛六龜皆是を想像せたの如し。

祐勸一駢黃金長一尺二寸

推古天皇御坐す

同一駢黃金四寸八分

聖武天皇御坐す

同一駢黃金七寸五分

陽成天皇御坐す

其餘同一駢蓋今一尺八寸

大藏冠法子御坐す

赤糞同一駢白銀七寸

圓白道長奉納

同一駢赤糞長五寸分

大僧正行基奉納

左の寺、御院記と竹達と委し宸室とす。勅とかくよんと中古

の圓像と勅等比像起發生れ核よりにす。傳集す。天武天皇赤

糞の一基と化とも中古に金分三寸二もの祐勸金堂とゆむと
丈友記曰天武天皇十五年大友興多始奉濟祐勸佛長三寸餘

也。二ニ就並て是多りよ。六の大像と送立す。あるとゆまゆり

然るに既往く是不審也。又貞觀金堂供養記曰貞觀元年

九月三日修復故墓伽藍送又祐勸像奉納來佛也。かどんと付

此多大像と送立。佛と以て分仰。後是可考之又金堂とも。是

仰並に沙也。然りゆくも。佛也。是尊の事。即ち西天祖國精舍の

因縁とほとく。是を車を西城於向。畧之山宮福ま

記曰昔祐勸是身を。郊率の摩尼殿より降り坐。是大師考。今

後欽明天皇附。百僧うち祐勸像取く。現に。黄に。才。聖主

護神より上長良教待仰くむむと曰珍又無着天親二
善魔を副送し、沙翁の杖作と云ふ大父家記曰國ゆも建主
迫江國造賀御三間四面檜皮葺金堂一宇、中、圓障の三柱と
中を佛法堂裏三間四面檜皮葺金堂一宇、中、圓障の三柱と
便と期す入道場手院鑿達桃三株即ち曰此三株ハニミナヒ
基三日先入道場手院鑿達桃三株即ち曰此三株ハニミナヒ
三觀寺大藏堂不減鐘塔一基金堂の傍より高一丈一尺圍
四尺五寸三幅三丈七寸同厚一丈六寸寺門は乳禪佈曰般若燈
樟石燈是ハ天智天皇修真法供養造砂之天皇開龍之日辛未
遂長入麻已後毎懺真罪恨意即位元來天皇有夢因創掌
福寺于長等山寺定不日而成忙繕工於栗園供養之日天雨
種く妙華梵塔乃現都淨相天皇遇祥瑞處山豁如也於是
新左無名指鉢放不火壇之下以訥徳日漏障也此其迷惑之元
亨款書曰天智皇帝七年春建崇福寺而平基砾得宝鋒長
九尺五寸又得白石長丈寸夜有光帝喜奇瑞新左手無名指鉢
鉢前燈石壇之中或記曰大殿階下燈壇昔時天智帝供真法供
養真迷惑也辰清柄もく、真法供養も崇福寺へ既もく
かく其迷惑の事アリ至る天智皇帝八年崇福寺と三升の丸
子移は迷惑と又立木移はとめ一

一國供舟 今キの事の御小行天多天武持院の事也御事
俗傳と云者御舟と云う事ナリ多代大御内侍御子御子
子深く御し漫御の事と云ふ事三言とも云即三官俗舟の事

持統天武二帝合葬之至三井の名もあらず二帝の御廟あり
之を分持すと云ふ故也國史曰天武天皇諱天命固りケ冬葛
承皇子舒明第一子母曰宝兒女舒明崩後位極之帝の四年
讓位葛城皇子固辞不受孝德天皇即立葛城皇子を子立
年帝位皇子之後不即位皇子祖母尊稱明立七年帝崩皇子
太子以孝不即位尚在太子称制左子六年春三月七日遷都于
近江七年春正月三日太子即位大津宮十年十二月三日天皇崩
于近江宇治天十年聖壽四十有六謚曰天智取因曰天武天皇
諱天渟中原胤真人天智曰母弟也而曰大海人皇子天智元年
立為東文四年妹九月天白主不脅冬十月廿四日天皇召入東宮
天皇弟於大殿授鷹蓋以來宮以出家修道而歸孝天皇聽之即
日東宮薙髮出家入吉野言大臣百官皆侍送矣十二月三日天
皇崩仰于茲大宮第此大友皇子有隙及明年以年為天武元年秋七月
而君戮于近江勢田近江朝軍不利皇子自殺九月事竟大皇
弟入于倭京二年春二月二日大皇弟即位鳴鳥淨原言朱鳥
元年九月九日天皇崩于正宮治也十九年謚曰天武取因曰持統天
皇諱高天原度野天皇アマノミコト名虧跡環良皇后文天音名朱鳥
母曰遠智娘アマニシメ明三年適大海人皇子房正妃生草壁皇子尊於
大津宮天武二年春二月三日立為皇后朱鳥元年妹九月尊天武
崩皇臨朝林刺十一年秋八月乙丑天皇禪位於皇太子十二月
十日崩道曰持統

一熊野權現社 在園内^{ナカ}の傍ま門傳祀御湯曰二條院平治元

年大僧正行慶

様井

金堂西の地創熊野權現社今冬十月三日

造畢十一月十日迎三所權現遷座等師長丈前大僧正行慶淨

鳥居役人法橋二人能智行勝阿岡梨二人故智倫曰先達二人

長嚴慶尹

已上六人者
降衣冠頭巾

本宮別當遠快

洋

授師正體於先達長嚴

慶尹奉荷仰正体撞云或記曰行慶至白河院の御事第

十三世のち走也或以紀伊國熊野社^{リヤマ}而之傳て社主も其室

いすく暇ア賜りに立かうり法華と釋尼神を國内に傳は

熊野一意ハ講説の座左主主を送至也と云く様井丈僧正

此社権現と號すゆきはもとより、某和年中^{タツノ}遣大师役行者

のゆともと大筆著^{シテ}候熊野ニ山^{シマ}破^{ハサ}セし以耳^ス奇^キ遂り

顯^ヒ察^ヒ他^ヒ驗^ヒの二教^ト尾師道大^ト夷^ト殊^ト候^ハ檢^ヒ過^ハ於^ハて^ハ役

氏^ト正^ヒ燒^ハ唯^ニ三升^トの^一門^ト烹^ハけ化^ハ所^トの^{経^ハ}も^トと^あと^なく

大^ト傍^ヒ正^ヒ三^ト所^ト権^ヒ現^ト地^ト連^ハび^ハ候^ハ道^トの^は漫^トと^ありの^ト

然^ヒ御^ヒ許^トを^か寧^ト伊^シ守^ル丹^トニ^二古^ト新^ト宮^ト達^{玉^ト}方^ト三^ト郡^ト

泉^ト律^ト事^ト解^ハ之^ム神^ト之^ム神^ト代^ヒ毫^ト角^トと^あ合^ハ近^ハ委^ハ神^ト名^ト快

曰^ハ伊^シ守^ル泉^ト郡^ト熊^ト御^ヒ社^ト之^ム座^ト神^ト社^ト

太津

熊^ト御^ヒ早^ト玉^トの^神社^ト

一毘沙門堂

然^ヒ御^ヒ社^ト北^ト廊^ト外^ト南^ト向^ハ之^ム也^ト

一經藏

立^ト四^ト面^ト源^ト寺^ト民^ト建^ト立^ト是^ト後^ト慶^ト長^ト七^ト年^ト竟^ト未^ト開^ト

一龕^ト龕^ト祖^ト堂

然^ヒ御^ヒ社^ト西^ト上^ト行^ハ之^ム也^ト

一長日護摩堂

後^ト少^ト庵^ト之^ム而^ト送^ト之^ム也^ト不^ト御^ヒ室^ト家^ト也^ト

立丈六方連慶の作制多迦丈一寸六分佛藍也大丈八寸六分

一降臨王也二丈五尺也大日也身也三尺四寸半分

一古鐘堂 圓伽丹のあゝ門俗或ハ鼓鐘事とて曰はる也

一考之寺有三門也口徑四尺半寸高既至八丈半寸幅也後以

一田名後寺也寺前有廣土也嘗有卿童神の社ひもあく三

斗山の根也寺前有古木也故號也也泥也石也也也也也

ちの傳也神跡曰當時供養寺也多有寺也寺也寺也寺也

宅不于也也以江以縣神也主其英雄一日造寺而入勢田龍

体客主度室也後湖海内く除奇以饗食於客也及去主神此之

以數三畫室地鐘其一也主神號曰燁是西天祐固精舍之表雜

所蓋梵籟也佛在世之時梵天帝釋將切利諸天降集祇園

而所造也音声微妙一觸耳則清滅新旧罪障即發善畏心佛

入涅槃後我堂奪去藏於宮中久矣今其卿為信秀卿五家

之後得鐘于湖中遂寄寺為法器未几鐘現祚之奇瑞也

內將有吉事時鼓鐘徧體堯行擊之無声又將有吉事時不撞

自鳴文永年中山侍冠吉寺在華嚴鐘碎破一日雪寄降處

未發出現四邊森森及羣麾觸之龍去雲散而後見鐘之所在

声亦如故又建武雖亂時忠敗後掠奪匿埋隱於地底隱在

地中自鳴從是將軍之軍日得勝利如是之奇瑞不止于斯今上

一二耳也、慶座主之記曰文永四年四月大日國寺守喚達文智

武家使南條左馬尉頼貞商左馬尉天寶去文永元年夏尚

引山燒寺也是今日返送之也、寺僧集曰文永初亂之始

後破壊あり、或書曰文保二年三井回禄山後取壇、不吟院人等
力攻巨杵撞之其音如雷々吼山後也之勢千無初奇岩下碎
破敵志始而破三井一日小蛇來章尾敲之壇高達如故無班再擊
告罷歸矣後文保元年正月又鳴止焉、吟院主嘗有詩曰
「此日や三井のうち清めひしりてゆるがにせんじ
彼邊を比敵ひそくつききをすとあくまや るゑのつこ
臣亦もと文保二年三井ち圓源の奉り、山後壇とぞを勅
のぐくシテノアノ事は事をうちれよ御へ不害奉事後、首
大津と某はの冠者とよへり武秀揚、江上と一寺建
く江東度キヒミナリ、せち此壇と爲て人を御沙とがんを妨
西海より而南下、西海より船來、而有と云々船の事、其
童神在志と惡神と布教人等とと、風者沙と惡神と布
教に童神焉候く、其をもしくをと、其者江馬と清とぞ良
龍神一の壇と冠者と云ふ、其丈達とおもく江馬すよゆい
ト年強く才し廢、其丈壇三井もとめど、又そらち内門就
御保田あまた田原者もあ歸之所寄也、と、辰清極もと天
地の大なり萬物の造化凡眼と云々謂へトに測、とよひと
おもひの役の如きとぞと、其の理と假令河、とゆひえひと
壇を核へもんやす歸童もよ人の手に洋々奉事却あ歸社
のありよゆせう考へアヒ、殊々度虎の松丸三井寺の西九

とれどもおとちゆく世人の心が善薩内にありて
をすゆと傳す。當時、豈か男子を遺せしもの
數くの御歎え元陽とすまむは、却る一生のうつ
るかうむ天に後悔乾坤を男女ごんと女よと罵りと
さんやああ、厭はれまく女よと罵りと、殊の日生
まる。天無を神と女仰こみを神とし、うつむけし七十五代
お達比命、ハ女子向くと旨の方の深の南極わく、佛
徳の事、人間も亦善薩とし内山の夜叉と承て地獄
便りせしとぞ深き事也。亦山の夜叉と承て地獄の城
とあらと禁制せし、世人の心深きが、あらんと爲化の城
肩のみ障ぬの井上、翠の井上、車をもよおす。且すも、正月
よりのいとされあり、十一年、牛年、正月より、廟宇拝ひ
きし者、後りて、おもむきし、金くらべたまく、破綻
とすむる者、おもむく車をもび附とすし、金をう
え算して、正月の牲年、金あれ、おもむく車をも金をう
小地蔵とすりて、底と金ひかへんと底をもすりて、
が、正月の牛車と車の金をうりまくお治工矣

一法華堂

法華堂　東の櫻橋の下西より今うなづ
常行堂　東の櫻橋の角より向ひて

一常行堂

法華聖事行持を益々天台三門の道場之まつ供養神様曰
清和天皇貞觀十七年正月三日法華堂を修建今二年之後

力政所長一位深達非子家內土佐國和食在某地度大治己卯十月
十日權使正法勢塔寺聖^護建五常行臺始從不以念佛淨業之
ニ傳記曰後一位深達非子後中書王具平之女宇治國小笠郡和
一也世号二金匱卒于本行臺弘永元年十月九日傳養以薨
國和食產送入云々

